

アフリカと 結びつきの深い国々

新潟県公立中学校教諭

なぜ国境は直線なのか？

16世紀以降の「大航海時代」に奴隷貿易が始まった。ギニア湾岸には、「奴隷海岸」「象牙海岸」「穀物海岸」と呼ばれる海岸がある。19世紀までに2000万人以上のアフリカの人々がそこから南北アメリカ大陸へ奴隷として運ばれた。

熱帯の風土病マラリアを克服できたので、ヨーロッパ人がアフリカ内部に進むことが可能となった。帝国主義列強は、19世紀に激しい競争をくり広げ、アフリカでも植民地を獲得していった。イギリスがエジプトから南アフリカを結ぶ縦断政策をとれば、フランスは北アフリカからサハラ砂漠をへて大陸を横断しようとした。このほかに、ベルギーやドイツ、イタリアも加わり、20世紀に入るまでに、ほぼ完全にアフリカは植民地として分割された。

アフリカに直線で引かれた国境線が現在に残っているのは、ヨーロッパ列強による植民地分割の際に、民族や地形を無視して地図上に定規で引いたからである。

宗主国との結びつきは今でも強い

1960年には1年間で17か国が誕生した。「アフリカの年」である。その後も独立は続いた。植民地時代の国境線を維持したまま独立国が誕生したために、それは独立後に民族間の対立や内戦が起こる火種となった。

アフリカでは、現在でも農産物や鉱産物は、旧宗主国の供給地になっている国が少なくない。フランスの植民地だったギニアやセネガル、チュニジア、マダガスカルの輸出先国第1位はフランスである。旧植民地と旧宗主国との結びつきは今でも強い。

アフリカと日本の結びつき

植民地時代のアフリカでは、ヨーロッパ人が特



「中学校社会科地図 初訂版」p.33

定の商品作物をプランテーションで栽培してきた。カカオ、コーヒー、油やし、サイザル麻などである。また、銅・金・クロム・ダイヤモンドを採掘して輸出してきた。アフリカの多くの国々は、現在でも数少ない商品作物や鉱産資源の生産と輸出にたよっているモノカルチャー経済である。

日本への輸出品では、モロッコ・モーリタニアのたこ、ガーナのカカオ、南アフリカの白金・マンガン・クロムなどがあげられる。

中学生にとってチョコレートは身近な物といえる。が、原料のカカオがどこでどのようにつくられているか生徒はわかっていない。「農園で働く少年たちの証言によると、朝5時から夜11時までカカオ豆の摘み取りに働かされ、労働時間が週100時間を超える子どもはめずらしくなかった。カカオ豆を詰めた袋は、ときに少年たちの背丈より高くなる。他の二人が手伝って、袋を頭の上に乗せてやる。歩き出すまで棒で殴られつづけ、急がないとまた殴られる。(中略)カカオ豆を集めたアフリカの子どもたちは、これが何になるかは知らない。ましてやチョコレートを食べたこともない」(石弘之『子どもたちのアフリカ』2005 岩波書店)。

アフリカの現状は貧しい。だが、豊富な天然資源はアフリカの潜在力である。アフリカの可能性はそこに秘められている。